



「志」つなぎ 伝える  
二百年



創設200周年

西形准教授がセンター長を務める「生命分子インターネットワークセンター」の キックオフシンポジウムを開催しました .....	1
西形准教授がテニュア教員として平成 29 年 10 月 1 日に採用 .....	2
西形准教授が平成 29 年度有機合成化学奨励賞を受賞 .....	3
高野准教授がテニュア教員として平成 29 年 12 月 16 日に採用 .....	4
佐合助教にテニュアトラック期間についてインタビューを行いました .....	6
「平成 29 年度山口大学と九州工業大学のテニュアトラック合同シンポジウム」を開催しました .....	8

第11号 2018年3月

## 西形准教授がセンター長を務める「生命分子インターネットワークセンター」の キックオフシンポジウムを開催しました

平成 29 年 10 月 3 日（火）、山口大学常盤キャンパス D11 講義室において、「生命分子インターネットワークセンター」のキックオフシンポジウムを開催しました。

「生命分子インターネットワークセンター」は、健康の維持増進や食料問題などの様々な問題の解決の鍵となる生命分子（炭素、水素、酸素、窒素などで構成される）に注目し、医・理・農・工・獣医学の垣根を超えたブレークスルーを目指しています。

当センターは平成 29 年 8 月に学内の「研究拠点群形成プロジェクト」に採択され、発足しました。9 名のコアメンバーを中心として構成されており、西形准教授がセンター長を務めています。9 名の研究者のうち、2 名のテニュア教員（西形准教授（平成 29 年 10 月にテニュア教員に採用）、上條准教授）、3 名のテニュアトラック教員（高野准教授（平成 29 年 12 月にテニュア教員に採用）、佐合助教、原助教）が参画しており、若手研究者を中心とした研究拠点として今後の活動に期待が寄せられています（ニュースレター 10 号で既報）。

初めに岡学長より、本研究センターの特徴は若さであり、山口大学の中心になるような研究センターとして今後の活躍を期待していると開会挨拶がありました。

続いて西形センター長より、山口大学の若手研究者の自由な発想により、異分野融合を行う学際的研究を推進することを目的としている等「生命分子インターネットワークセンター」の紹介が行われました。

その後、コアメンバーによる研究紹介があり、原助教、堂浦助教、川本助教、佐合助教、高野准教授、藤井准教授、隅本准教授、上條准教授よりそれぞれの研究内容について講演がありました。

続く特別講演では、東京大学医学系研究科 浦野泰照先生により「蛍光ライブイメージングを基盤とする化学の新たな医療・生物学応用」と題した講演をいただきました。

閉会にあたり、堀学術担当理事より、基礎から応用まで研究成果が繋がっていくことを期待すると挨拶がありました。

キックオフシンポジウム終了後の交流会では学生による生命分子ポスターセッションとポスター賞授賞式が行われ、盛会のうちに終了しました。

今後の「生命分子インターネットワークセンター」ならびに参画する各研究者の活躍が期待されます。



会場の様子



センター長 西形准教授によるセンター紹介

## 西形准教授がテニユア教員として平成 29 年 10 月 1 日に採用

大学院理工学研究科(現:創成科学研究科)にテニユアトラック教員として採用された西形准教授が、テニユア審査を経て平成 29 年 10 月 1 日にテニユア教員(准教授)として採用されました。

西形先生に、テニユアトラック期間中の活動についてお話を伺いました。



～平成 24 年	九州大学先導物質化学研究所 特任助教
平成 24 年度	山口大学大学院理工学研究科(工学)に准教授(テニユアトラック)として採用(平成 24 年 10 月 1 日)
平成 27 年度	銅触媒によるクロスカップリング法の限界を超えた第 4 級炭素中心の新規合成法を開発し、「ACS Catalysis」に掲載 中間審査(平成 27 年 9 月)
平成 28 年度	アミドと銅の相互作用を利用し、安価なアルカリフッ化物を用いて選択的フッ素化の手法を開発し、「Angewandte Chemie - International Edition」に掲載 テニユア審査(平成 28 年 10 月)
平成 29 年度	天然では得られないアミノ酸を作る基本技術を開発し、「Angewandte Chemie, International Edition」に掲載 山口大学大学院創成科学研究科(工学)に准教授として採用(平成 29 年 10 月 1 日)

### 1. 研究主催者として

#### 1-1. 着任当初は、どのように研究計画を立てましたか。

それまでの研究内容とはテーマを変えて、有機合成化学で最

も難しいと思われる『第 4 級炭素の合成方法の開発』に挑戦しました。炭素原子は、その周りに 4 つまで置換基を配置することが可能であり、炭素原子が水素原子以外の 4 つの原子で置換された化合物を第 4 級炭素と呼びます。級数が増えるにつれて炭素原子周りが立体的に混みあってくるため、4 つ目の置換基導入は困難になります。しかし、理論的には実現可能ですので、新しいチャレンジを始めました。

#### 1-2. テニユアトラック期間中の主な研究内容について教えてください。

これまでに達成されていない炭素-炭素、酸素そして窒素結合形成法を開発しています。特に、クロスカップリング反応で研究されてきた触媒反応を応用し遷移金属錯体を精密に設計することにより、有機反応過程で生じる活性種(カチオン、アニオン、ラジカル種)を自在に制御し斬新な触媒的結合形成反応開発を目指しています。開発した反応を用いて医薬品分子の効率的合成法も研究しています。

#### 1-3. その中で特に重要だと感じている研究内容について教えてください。

第 4 級炭素の合成方法を開発したことです。

#### 1-4. 研究資金は十分でしたか。

機関からのスタートアップ研究予算に加え、個人選抜型テニユアトラックに選抜していただいたので、着任後の比較的早い段階で必要な機器を揃えることができました。それがなければ、今の成果に繋がっていないと思います。特に、有機合成化学の分野では多くの薬品が必要となるので、着任直後に 400 種類を購入し、現在では 3 千種類になりました。

#### 1-5. 研究に専念できましたか。

学生の配属も多く、また、ほとんどの学生が大学院に進学するので、研究に専念できる環境でした。

#### 1-6. 学生への教育では、どのような授業を担当しましたか。

学部対象は、演習、学生実験、機器分析、共通教育授業、有機合成化学、各種分担授業、そして、大学院では、化学系特論、有機化学特論、高度ものづくり創成演習などを担当しました。非常に多くの授業を担当することで、配属希望をする学生も安定的に確保できました。

### 2. 周囲からの支援について

#### 2-1. メンターの先生とは、どのようにコミュニケーションをとっていましたか。

メンターの上村先生と、ゼミの学生とともに週 1 回雑誌会を開催していました。学生が論文を読んで発表し、研究内容のディ

スカッションを行いました。

学外のメンターの先生が熊本大学におられるので、学会等でお会いしてディスカッションをする他、招聘して講演して頂きました。

2-2. 同じ研究室の学生や研究者とは、どのように協働していましたか。

学生さんは実験をして、実験結果の議論を一緒にやっています。私の研究室にはこれまでに2名のポスドクがいました。ポスドクは学生と年齢も近く、良き先輩として、研究室の良い雰囲気をつくってくれました。

### 3. テニユアトラック制度について

3-1. なぜテニユアトラック教員に応募したのですか。

研究に専念できる環境と、研究費が付くことが魅力的だと思いました。また、個人選抜にも必ず応募しようと考えていました。

3-2. デメリットがあるとすれば何だと思いますか。

特にデメリットは感じません。1人で研究ができる人や、研究をメインにしたい人には良い制度だと思います。

3-3. 中間審査やテニユア審査は、どのように行われましたか。

論文や研究費の獲得に関する書類を提出し、審査を受けました。着任当初は、初めて挑戦する分野でしたので、プレッシャーを感じましたが、年々上手く行きそうだと実感を得ることができました。

### 4. 今後について

4-1. テニユアトラック期間中はどのような時間でしたか。

テニユアトラック期間中だからといって、特別な意識はありません。いつも通りのことをしていました。しかし、研究室を主催することで、研究や学生など様々なことに責任を持つことを改めて実感しました。

4-2. これからテニユアトラック教員に応募しようとしている若手研究者がいるとすれば、勧めますか。

研究をしたい人には、大いに勧めたいです。

4-3. 今後の抱負を教えてください。

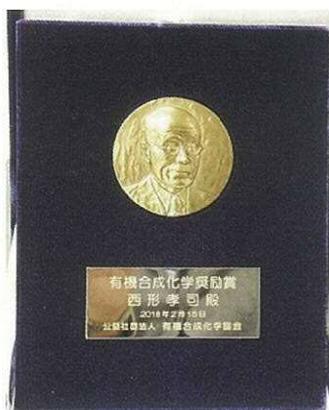
1つ目は、研究をより発展させたいと思います。始めに紹介した第4級炭素の合成法を開発したことにより、これまでに合成することのできなかつた物質を短行程で合成できるようになりました。

## 西形准教授が平成29年度有機合成化学奨励賞を受賞

西形孝司准教授は、平成29年度有機合成化学奨励賞を受賞し、2月15日(木)に如水会館(東京都)において開催された有機合成化学協会第81回通常総会で表彰されました。

本賞は、有機合成化学及びその関連産業の分野で優れた研究または発明を行った40歳未満の若手研究者に贈られるものであり、若手有機化学者の登竜門として位置づけられている賞です。選考過程は、2回の書面審査を経たのちに17名から成る審査委員に対して業績説明を行うという3段階で構成されており、受賞への道のりが非常に厳しいことで知られています。

今回の受賞は、「 $\alpha$ -プロモカルボニル化合物を用いる官能性第4級炭素の構築法確立」の業績が認められたものです。この研究は、有機合成化学において難題の一つとして認識されている第4級炭素化合物の効率的合成法に関するものです。炭素はその原子周りに4つまで置換基を持つことができますが、4つ目の置換基導入は立体的に非常に困難であり、従来法では多くの制限がありました。西形准教授のグループはラジカルが持つ高い反応



性に着目することで、この難題を解決するための基礎理論を構築することに成功し受賞に至っています。医薬品や天然物をはじめとする様々な有用物質の効率的合成への応用が期待されます。

なお、本受賞に対して西形准教授は、「今回の受賞は、当有機化学研究室に所属する学生たちも含めたチームとしての成果と思っています。新たな知見を生み出すために、共に頑張ってくれた学生たちに感謝するとともに、今後も素晴らしい優れた技能・知性を持つ学生たちとともに研究を楽しんでいきたいと思っています。」とコメントをしています。

### 公益社団法人 有機合成化学協会 平成30年度(第81回)通常総会報告会・表彰式・講演会



## 高野准教授がテニユア教員として平成 29 年 12 月 16 日に採用

共同獣医学部にテニユアトラック教員として採用された高野准教授が、テニユア審査を経て平成 29 年 12 月 16 日にテニユア教員（准教授）として採用されました。

高野先生に、テニユアトラック期間中の活動についてお話を伺いました。



～平成 24 年	財団法人日本予防医学協会リサーチレジデント
平成 24 年度	山口大学共同獣医学部に准教授（テニユアトラック）として採用（平成 24 年 12 月 16 日）
平成 27 年度	日本衛生動物学会 佐々賞受賞 中間審査（平成 27 年 6 月）
平成 29 年度	テニユア審査（平成 29 年 6 月） 共同獣医学部に准教授として採用（平成 29 年 12 月 16 日）

### 1. 研究主催者として

#### 1-1. 着任当初は、どのように研究計画を立てましたか。

テーマは、前職の研究内容の延長と新しいテーマの2種類を設定しました。前職では疫学研究を主に行っていましたが、着任後は基礎研究にも取り組むこととし、後者は上手くいかないこともあるため、同時に複数のプロジェクトを進めることにしました。前職から取り組んでいる内容は、研究が進んできてあ

る程度成果が期待できるものでした。他方、新しいテーマは研究助成の公募に応募したことはありませんでしたが、それまでは採択されなかったテーマです。山口大学に着任した後、採択されることができました。

#### 1-2. テニユアトラック期間中の主な研究内容について教えてください。

主にマダニによって媒介される感染症の基礎研究および疫学調査研究を行っています。節足動物媒介性感染症は、国外はもとより、国内でも多くの患者さん・患者が発生している感染症です。しかしながら、その多くの感染症で予防法は未だに確立されていません。このため、生態系内での病原体の拡散に関するリスク因子を明らかにすることを主目的とした疫学研究と共に、節足動物体内での病原体の媒介メカニズムを解明し、最終的に新しい予防法を確立することを目指して研究を行っています。

#### 1-3. その中で特に重要だと感じている研究内容について教えてください。

マダニ媒介性感染症は、その発生に地域性や季節性が見られることが特徴です。すなわち、ベクターとなるマダニが生息する場所・時期にだけ疾患が発生するため、媒介マダニと病原体がどこに存在し、自然界でどのように維持されているかを知る事が感染症の予防に重要です。以上のことから、国内外における病原体の分布調査（疫学調査）を行い、そのリスクについて評価を行ってきました。他方、マダニの同定は非常に難しく、日本国内で形態学的な同定を行える研究者は5名程度と少数です。このため、各地方衛生研究所や大学などの研究機関でどなたでも使えるような遺伝子アーカイブを構築し、HP等で公開しています。また、着任後に開始した基礎研究では、これまでほとんど研究が行われていなかった、マダニの自然免疫系の機能解析を進めています。

#### 1-4. 研究資金は十分でしたか。

まず、全く何もない状態から揃える必要がありましたので、1年目のスタートアップで必要な機器や備品類を購入しました。購入する物には優先順位をつけて、例えば顕微鏡は高価なレンズは後回しにしました。研究で不可欠なマダニの飼育や実験にも特殊な設備が必要でしたので、3～4年目でようやく必要な機器が揃ってきました。

#### 1-5. 研究に専念できましたか。

研究の時間は十分確保できました。授業は集中講義やオムニバス形式の講義で、学内委員は他の先生に比べ少なかったです。

#### 1-6. 学生への教育では、どのような授業を担当しましたか。

1年生向けの獣医学概論の他、共通教育として共同獣医学部以外の学生向けに動物のことを教えました。獣医3年生向けの

キャリア形成論では、研究職を目指す学生へのキャリア形成方法等について講義を行いました。

## 2. 周囲からの支援について

### 2-1. メンターの先生とは、どのようにコミュニケーションをとっていましたか。

2名のメンターの先生がいました。1人は同じユニットでしたので、週に2回、研究室のゼミを共同開催していました。私が研究室の学生と進めている実験のことを紹介し、アドバイスをもらっていました。また、多数の共同研究を行っていたので、その内容については随時打ち合わせを行いました。

もう1名の先生とは研究内容が異なっていましたので、研究よりは学部全体のことについて、半年に1回のペースで話をしていました。必要に応じてメンター以外の先生が同席することもありました。

### 2-2. 同じ研究室の学生や研究者とは、どのように協働していましたか。

研究室というよりは、共同獣医学部は学生の数が多くないのでユニット単位で毎年2~3名の学生さんが配属されていました。このため、私の研究室には1名あるいは全く学生さんが来ない年もあります。学生さんは獣医師の国家試験があるため、とても沢山の授業や実習があります。学年にもよりますが、授業がなく実験ができるのは、週1日の半日ほどしかない年もあります。3年生の12月くらいに配属が決まりますので、春休みに実験の仕方を学んでおかないと、4年生から実験を始めることができません。私の研究室にはテクニシャンが1名と、昨年度まではポスドクがいたので、皆で3年生の指導を行っています。特に、学生はポスドクがいると良い刺激を受けていると感じています。

## 3. テニュアトラック制度について

### 3-1. なぜテニュアトラック教員に応募したのですか。

自身のキャリアアップのために、公募を探していたところ、山口大学の公募を見つけました。あまりテニュアトラックであることを重視していませんでした。結果的には、テニュアトラックでよかったと感じています。

### 3-2. デメリットがあるとすれば何だと思いますか。

テニュアトラック教員であることで、頻繁に報告書が求められるくらいでしょうか。先ほど述べたように、研究に集中できる制度なので、とても良い制度だと思います。

今後の不安としては、これから授業の担当が増えると大変になるかなという点があります。しかし、周囲の先生との関係はとても良好ですし、執行部から一気に授業の負担が増えないような配慮もありますので、こなしていけるだろうと思っています。

### 3-3. 中間審査やテニュア審査は、どのように行われましたか。

書類と面接がありました。テニュアの基準は、着任後に示されて、調整があり、自分も同意の上でしたので、あまりプレッシャーとは思っていませんでした。

## 4. 今後について

### 4-1. テニュアトラック期間中はどのような時間でしたか。

とても早いと感じる、怒涛の5年間でした。プライベートでも、ライブイベントもありましたので、一言で表すと充実していました。

山口大学に着任してからの研究で言うと、同じユニットの先生から色々な事を学ぶことができました。私はそれまで細菌学の分野を専門としていましたが、同じユニットの先生はウィルスを専門としています。これまでに一緒に研究したことがない分野の先生から、他の分野での研究方法を学ぶことができたと感じています。具体的には、学会では完成された内容を発表しますが、ゼミでは上手くいったことだけでなく、失敗したことなど試行錯誤の経緯まで知ることができます。これらの経緯を学生と一緒に考えることで、自らの実験や研究の方向性を考える上で非常に勉強になりました。4月からユニットの再編が予定されており、この先生とは別のユニットになりますが、ゼミは今後も継続する予定にしています。

### 4-2. これからテニュアトラック教員に応募しようとしている若手研究者がいるとすれば、勧めますか。

分野によるのかもしれませんが、若手の先生には良いチャンスと思いますので勧めたいです。やはり着任して1~2年は研究室のセットアップと新しい環境に慣れることが大変です。研究基盤を整えられるスタート資金と、研究に集中できるエフォート確保は魅力的だと思います。

### 4-3. 今後の抱負を教えてください。

私の専門とする分野は日本国内の専門家が少ないので、次世代の研究者を育てることが最も重要だと考えています。丁度私が山口大学に着任したところ、国内でマダニが媒介する感染症である重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の罹患者が報告されました。その直後から私のところにも、新聞やテレビなどの様々なメディアからの取材や、講師の依頼が多くありました。マイナーな分野ですが、社会からの要請は大きいということです。次世代の研究者を育てなければ、技術や知識を継承することができず、研究者世代に空白世代ができてしまいかねません。そうなれば、研究の発展や、人が安心して生活できる環境の維持にとっては大きな痛手となります。そのため、研究の発展は勿論ですが、次世代の育成をこれから積極的に行いたいと考えています。

## 佐合助教にテニユアトラック期間についてインタビューを行いました

大学院農学研究科（現：創成科学研究科）にテニユアトラック教員として採用された佐合助教は、まもなくテニユアトラック期間の5年目となります。そこで、テニユアトラック期間中の活動についてお話しを伺いました。



平成 22 年度	九州大学大学院生物資源環境科学府博士 後期課程修了 博士（農学）
平成 23 年度	日本学術振興会特別研究員 PD （九州大学） 豊橋技術科学大学工学研究院 博士研究員
平成 25 年度	山口大学農学部附属農場 助教（テニユア トラック）
平成 28 年度	中間審査（平成 28 年 7 月）
平成 30 年度	テニユア審査実施予定

### 1. 研究主催者として

#### 1-1. 着任当初は、どのように研究計画を立てましたか。

着任する前は、施設園芸学を専門としており、植物が周囲の環境に合わせてどのように反応するのかを研究していました。博士課程の学生の時は、根の養分吸収をテーマにしていました。ポスドクでは、トマトの栽培について研究をしていましたが、その中で養分吸収の研究をさらに発展させたいと思うようになりました。山口大学の公募は植物工場を利用した植物生産に関する研究ということでしたので、野外で育てている際のような複雑な条件ではなく、シンプルな条件で養分吸収について研究ができると考えました。しかし、私にとって植物工場での植物の育成は初めてでした。そのため、どのような課題があって何を解決すれば社会に還元できるのか、生理障害などを想定しな

がら、初めの1年間は課題と出口を見つけることから始めました。

その中で自分の予想と異なると感じたことがあります。1つ目に植物工場は、気温や光をコントロールすることができますので、安定しているように感じられますが、実は場所によって光の当たり方や温度などにばらつきがあるという点です。2つめは、植物工場での生産性向上には生理障害の影響が大きい点。3つ目は植物栽培用の照明は進歩を遂げているという点です。また、植物工場の大きな課題としてコストがよく挙げられますが、研究をしてみると植物工場での植物生産は様々な栽培方法の1つとして成り立つのではと考えています。

#### 1-2. テニユアトラック期間中の主な研究内容について教えてください。

植物の生理機能の評価や、得られた情報に基づいた施設園芸や植物工場における環境制御について研究しています。

施設園芸は、温度や湿度、光などの栽培環境を制御することによって作物の収量や品質を高めることを目指した栽培方法です。近年では、施設園芸をさらに高度化させて、周年をとおして計画的に生産することを目指した植物工場も開発されています。

#### 1-3. その中で特に重要だと感じている研究内容について教えてください。

1. 葉菜類のチップバーンの回避技術の開発
2. 葉内硝酸態窒素含量の低減技術
3. 環境ストレスによる野菜の高付加価値化
4. ミネラル高含有野菜の生産技術

上記4つの課題について成果を得ることができました。

#### 1-4. 研究資金は十分でしたか。

研究資金としては、照明器具や分析機器が購入できたので困ることはありませんでした。

#### 1-5. 研究に専念できましたか。

学内委員を免除していただく等の配慮をして頂き、研究専従時間を確保することができました。また、研究を進める上で植物工場内とハウスで植物を育てるスペースの確保が重要なのですが、他の教員よりも広い研究スペースを提供していただいたり、優先的に使用できるように配慮して頂きました。

植物工場では水耕栽培、ハウスでは養液土耕栽培を行っています。私はハウスの環境制御を専門としていますので、学内の先生から紹介されて、カイガラアマノリという山口特産の海藻のハウス育成に関する共同研究も行っていました。

#### 1-6. 学生への教育では、どのような授業を担当しましたか。

基礎セミナーという1年生向けの座学の他、2～3年生の実

験や農場実習を担当しました。農学部の子生の半分は、大学に入学して初めて植物を育てます。研究をする上でも、毎日植物の世話をしながら観察して変化に気づくことはとても重要です。そういったことを学べるように、実習を担当しました。その他には学生へ自分の研究をアピールできる場として、研究を紹介するガイダンスも行いました。

## 2. 周囲からの支援について

### 2-1. メンターの先生とは、どのようにコミュニケーションをとっていましたか。

2名のメンターの先生がおられ、メンター会議を3か月に1度くらいのペースで開催しました。通算で15回以上開催しています。また、1名の先生とは研究テーマも近いので、研究について逐一相談に乗って頂きました。これまでに教員としての経験が少なかったのですが、とても様々なことを教えて頂きました。

### 2-2. 同じ研究室の学生や研究者とは、どのように協働していましたか。

3年生の後期から週に2回ゼミを開催していました。英語の教科書の輪読や論文の解説と発表などを行いました。前述したように、栽培を初めて行う学生が多いので、観察が大切であることを教えました。変化を見落とさず、なぜそうなったのかを一緒に考えます。植物の生育を知り、接し方を学ぶことで、課題解決の方法を学ぶことができると考えています。

## 3. テニユアトラック制度について

### 3-1. なぜテニユアトラック教員に応募したのですか。

以前はポスドクをしており、プロジェクト内でトマトの栽培を研究していました。そのテーマが軌道に乗る目途が立ったので、キャリアアップとして教員公募を探していました。植物工場で自分のテーマに挑戦してみたいということと、テニユアトラックにより自分の研究ができるということが魅力だと感じて応募しました。

私のテーマは、根による養分吸収と植物の周辺環境への対応です。これらを結びつけて研究している人は、多くありません。しかし、植物工場で根による吸収を研究することで、植物の成長や生理現象をモデル化・定量化ができるのではないかと考えています。

これまでの研究で、植物工場では方向性が見えてきたと感じています。植物工場で定量化ができれば、野外で栽培する際の知見にも繋がると考えています。このように、研究と現場を繋ぐのが大きな目標です。

### 3-2. デメリットがあるとすれば何だと思えますか。

授業が少ない分学生との接点が少ないので学生に施設園芸学講座に興味を持ってもらえるようにアピールするのが大変でし

た。

これまでに配属された学生は、就職希望者が多く大学院に進学する学生はいませんでした。引き続き研究することの楽しさを伝えていきたいと考えています。

### 3-3. 中間審査はどのように行われましたか。

論文の発表状況などに関する書類を提出しました。テニユア審査の基準については、丁度良いと思います。しかし、基準を達成するようにと条件を出されたことが初めてなので、その心配はありました。

## 4. 今後について

### 4-1. テニユアトラック期間中はどのような時間でしたか。

自分のやりたい研究に挑戦できましたし、植物工場で新しいテーマに取り組むことができました。根の養分吸収の研究を発展させる突破口を見つけられたと思います。

植物工場での研究は、当初の計画を変更するなど思ったより難しく、試行錯誤の連続でした。工場での生産に慣れるというのが大変で、予測が外れることもよくありました。しかし、1つ1つの課題を自分のテーマと関連付けながら、研究を発展させるヒントが掴めたと感じます。

### 4-2. これからテニユアトラック教員に応募しようとしている若手研究者がいるとすれば、勧めますか。

間違いなく勧めます。テニユアトラック教員に着任すると、自分の研究に思い切り取り組むことができます。研究費を自分で獲得しなければならないなど、大変なこともありますが、自分の研究に集中できる環境を得られることが重要だと思います。

### 4-3. 今後の抱負を教えてください。

テニユアトラック期間で、研究も軌道にのってきたと感じます。

研究については、植物工場と野外農業をリンクさせ、自分の研究成果を農業の現場に活かすことを目標にしています。メインテーマは植物工場の課題を解決することですが、現在はビニールハウスでの養水分管理の研究も並行して行っています。最終的には、現場で生かすために今後も研究に取り組みたいと考えています。

学生に対しては、研究への興味を感化できるような研究・教育をしたいと思っています。

# 「平成 29 年度山口大学と九州工業大学のテニュアトラック合同シンポジウム」を 開催しました

平成 30 年 2 月 27 日（火）、山口大学吉田キャンパス大学会館において、「平成 29 年度山口大学と九州工業大学のテニュアトラック合同シンポジウム」を開催し、大学関係者や企業など約 40 名が参加しました。

開会に先立ち、山口大学 堀憲次 学術担当理事・副学長より、大学内でのテニュアトラック制度の活用状況の紹介があり、本シンポジウムでの異分野交流により良い刺激が受けられることを期待する旨挨拶がありました。

続いて、科学技術振興機構プログラム主管 榎敏明氏より、来賓挨拶並びに日本におけるテニュアトラック制度の実施状況について統計データを基にご講演頂きました。

その後、九州工業大学の片宗優貴 特任助教、西田裕也 特任助教、山口大学の佐合悠貴 助教、元木業人 助教の計 4 名のテニュアトラック教員により研究成果についての発表が行われ、続くポスター発表では、テニュアトラック教員とテニュア教員及びそれらの教員が指導する学生により 11 件の発表があり、活発な意見交換が行われました。

閉会に当たり、九州工業大学の早瀬修二 若手研究者フロンティア研究アカデミー アカデミー長（理事・副学長）より、閉会の挨拶としてテニュアトラック制度による学内の研究活性化、本シンポジウムによる分野の垣根を超えたディスカッションが視野を広げることを期待する旨ご挨拶をいただき、合同シンポジウムは盛会のうちに閉会しました。

文部科学省科学技術人材育成補助事業テニュアトラック普及・定着事業

## 平成29年度 山口大学と九州工業大学の テニュアトラック 合同シンポジウム

平成30年 **2/27** 火 14:00 - 17:00  
[17:10~情報交換会]



**会場** 山口大学吉田キャンパス 大学会館 2階会議室

**参加費** シンポジウム 無料 / 情報交換会 3,000円  
氏名、所属、情報交換会参加の有無をご記入のうえ、2月20日(火)までにE-mailでお申し込みください。  
【申込先】 [tenure@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:tenure@yamaguchi-u.ac.jp)

**アクセス** (山口大学) <http://www.yamaguchi-u.ac.jp/info/13/616.html>

**プログラム**

- 開会挨拶 山口大学
- 来賓挨拶 科学技術振興機構
- 講演 九州工業大学<片宗特任助教>  
九州工業大学<西田特任助教>  
山口大学<佐合助教>  
山口大学<元木助教>
- ポスター発表
- 閉会挨拶 九州工業大学
- 情報交換会

**お問い合わせ先**

(山口大学)	大学研究推進機構研究推進戦略部9A室<福田>
TEL 083-933-5134	E-mail <a href="mailto:tenure@yamaguchi-u.ac.jp">tenure@yamaguchi-u.ac.jp</a>
(九州工業大学)	若手研究者フロンティア研究アカデミー<大賀>
TEL 093-884-3510	E-mail <a href="mailto:itacademy@jimu.kyutech.ac.jp">itacademy@jimu.kyutech.ac.jp</a>



JR新山口駅(直行) 電車で(10分)  
JR新山口駅(バス) 徒歩25分  
JR新山口駅(バス) 徒歩30分

山口大学 吉田キャンパス

山口大学 九州工業大学



講演の様子



ポスター発表の様子

文部科学省 科学技術人材育成費補助事業 テニュアトラック普及・定着事業

編集・発行

国立大学法人山口大学 大学研究推進機構研究推進戦略部 URA 室テニュアトラック担当

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1 山口大学吉田キャンパス共通教育棟本館 2階

Tel 083-933-5036

E-mail [tenure@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:tenure@yamaguchi-u.ac.jp)

URL <http://www.tenure.jimu.yamaguchi-u.ac.jp/>